

特集

「農の学びと子どもの育ち」

「農」が人間性をどう発達させるか―農の持つ教育力は、すでに、多くの小・中学校の教育実践で明らかにされている。例えば、本誌でも取り上げた東京・日暮里中学校の、長野・安曇野の農家で農業実習の体験を3泊4日の修学旅行で20年間も続けた実践（桐山京子「にいがたの教育情報」56 1998・12）や福島・熱塩加納小学校の「農業科」の実践（境野健児「前掲書」94 2008・6）がその例である。

また、2008（平成20）年度から始めた文科省・農水省・総務省の連携による「子ども農山漁村交流プロジェクト」は、農業生産や農村生活を子どもたちに体験させることによって、その教育的機能を生かす取り組みである。

その一方で、我が国の農業は、TPP、EPAに見られるように多国籍企業の効率主義・市場原理によって壊されようとしている。農業は、有史以来人間の生命に欠かせない食料生産であり、自然を相手

とする農業は本来経済効率にはなじまない。

土と離れることが、コミュニケーション能力の衰退（人と人のふれあいの薄さ）、子どもの荒れ、校内暴力、いじめなどの要因ではないかと危惧されている。その対策に全国の小中学校では「総合的な学習時間」などで子どもたちに「農」を体験させ、子ども人間らしい成長・発達に役立てようとしている。

そこで、改めてヒトが人として育つ場として農の持つ教育的価値を、新潟県に即して、小・中・高での農の学びから探りたい。また、農業高校の卒業生が農業実習等を通していかに自己の人間形成につながったかも合わせて追求したい。

なお 満州事変から86年、日中戦争全面開始から80年の今年、戦争と平和の問題を現状と関わって考えてみたいと小特集とした。

編集部